

## 発刊の辞

大妻女子大学文学部長

石橋幸太郎

当大妻女子大学の文学部紀要第一巻が刊行される運びになったことはご同慶のいたりである。この機会に一言所感を述べて発刊の辞にかえたいと思う。

今日では、大学と名のつくところはどこでも紀要をもっていて、年々発表される論文はおびただしい数にのぼっているはずである。そして論文の内容も出来ぐあいも千差万別で、かならずしも優秀なものばかりとは限らないようである。もちろん、これはわたくしの専門の方面で、しかもわたくしの眼に付いた限られた範囲の論文について言うのであって、他の部門はどうだか知らないが、おそらく大同小異ではないかと思われる。しかし、たとえ優れた論文ばかりでなくても、このように多数の人びとが論文を発表するということは、何といっても現代の盛事であって、めでたいことと言わねばならぬ。

発表された論文が優れたものである場合は、われわれは、それによって大いに啓発され、筆者に対して敬意と感謝の念を抱くのであるが、たとえ未熟な論文でも、論文を発表すること自体が貴重な体験になることを考えれば、論文の出来・不出来は二義的な意味しかないともいえる。ちょうど画家の修業に習作が必要であるように、学問の世界にも、当然、習作時代があつてよい。紀要は、もちろん、草紙ではないけれども、やがて飛び立つための準備の場という一面があつてもよいであらう。

学生生活において、書きたいことが内に発酵して表現を迫るというような、あつらえ向きの状態は、そういつもあるものではない。明確な形をもたない思想でも、書いているうちに、次第に焦点が定着してきて、思想は思想を生み、いわば思想の独り歩きで論文が完成するということも珍らしくはない。これは、作中人物が作家から独立して勝手な行動をするようになるというのと似た現象である。不明確な未熟な思想であるにもかかわらず、あえて、われわれに筆をとらせるものは、外部からの動機、すなわち、発表の場を与えられることである。紀要にはそんな効用もある。また、専門を異にする同僚が、どんな問題ととくんでいるのかを、かいまみる機会も紀要は与えてくれる。貪欲な知識欲さえあれば、いくらでも智慧袋をふくらませることができるのである。

ひるがえって、眼を窓外に転ずると、いまや学園は紛争の巷と化して、大学問題の帰趨はどうなるものか予見できない状態である。大学紛争は単にわが国だけのことでなく、諸外国にも共通の一般的傾向である以上、われわれ学究にとっても重大で深刻な意味をもっていて、決して対岸の火災視することはできない。しかし、たとえ大学制度がどういう形に落ちつくにせよ、われわれ教師に課された務めは、学問の探求と、どういう形になるにせよ、とにかく学生の教育、ということに尽きるということに関しては、いささかの揺るぎもありえないと思う。

たまたま、大学紛争が政治問題にまで発展した時点において小文を草することになったため、大学問題にも触れたのであるが、これは、われわれの学生生活の本質につながる根本問題であって、ゆきずりに論じつくせるものでないことは断わるまでもない。

それはとにかくとして、研究発表の一つの場である紀要が刊行されることは、さきに述べたような、いろいろな意味で、まことに喜ぶべきことで、今後、巻を重ねるに従って、いよいよ内容の充実したものとなるよう念願してやまない。

一九六九年一月